

# 鉄くそぶとり

続旧聞日本橋・その二

長谷川時雨

青空文庫



あんぽんたんと言われた少女のおぼつかない記憶にすぎないが、時が、明治十六年ごろから多く廿年代のことであり、偶然にも童女の周囲が、旧江戸の残存者層であつて、新文明の進展がおくれがちであつたことなど、幾分記録されてよいものであつたためか、先輩の推賞を得た拙著『旧聞日本橋』の稿を、ここにつづけることをよろこびといたします。

お夜食におくれて、遅く帰つて来た人のお菜に、天ぷらをとりにいった女中が、岡持のふたをあげながら、近所の金持ちの主人

が、立食たちぐいをしていたということ、

「お薬缶やかんのようにテラテラ光つて——」

といったので、台所に湯気をあげている銅薬缶あかやかんの大きいのを見て、天ぷらやの屋台に立っていた、恰幅かつぶくのいい、額の長く光つた、金物問屋の旦那さんの顔を、あんぽんたんまでが思出して、一緒に笑った。

堅気な町には、出前おもを重おもな蕎麦そばやがあるくらいなもので、田所町に蒲焼うなぎやの和田平、小伝馬町三丁目にも蒲焼の近三、うまや新道から小伝馬町三丁目通りにぬける露地に、牛肉の伊勢重があるだけだった。

現いま今は、人形町通りに電車が通り、道幅が広がっているが、人

形町通りはおおもん大門通りと平行して豎に二筋ならんでいたのだが、  
 大門通りの気風と、人形町とはまるで違っていた。人形町通りは、  
 昔の三座や、その他の盛り場のあつた名残りで、日本橋区中の繁  
 華な場処なのに、大門通りはおおだな大商家が、のれん暖簾をはずし、土にほうき箒目  
 をたてて、打水をすましてしまうと、何どこ処もひっそりしてしまつ  
 て、大戸をおろした店蔵みせの中では、帳合がすむと通いの番頭さん  
 は住居に帰り、あとは夜学——小僧たちが居ねむりをしながら、  
 手習や珠算の練習をやる。もつと尤も、大門通りは名のごとく万治の昔、  
 新吉原へくるわ廓が移けない前の、遊女町への道筋の名であるゆえか、  
 大伝馬町、油町、田所町、長谷川町、富沢町と横筋にも大問屋を  
 持つ五、六町間の一角だけがことに堅気な豎筋なので、住すみよし吉町、

和泉町いずみ、浪花町なにわとなると、葭町よしの方に属し、人形町系統に包含され、柔やわらいだ調子になつて、向う側の角から變つてくるのが目につつていた。そして、劃かく然ぜんとではないが、もうそのあたりは大門通りとはよばなかつた。大門通りの突当りといった。突当りの感じのするように和泉町が押出していてそれから道幅がせまくなり、ゴミゴミした裏に、松島町の長屋があつたのだ。

大門通りでは、屋台店も、表筋の道路へは遠慮して出なかつた。横町の、人形町側へ出はずれかける場所に、信用されている品のよい店が秋から春まで一、二軒出た。

屋台店の立食は、湯がえりの職人か、お店の人の内密食ないしよくい、そのほかは、夜長の、夜業よなべをしまったあとで時折買うものだと、大

問屋町の家庭では下女たちまで、そんなふうに堅気にしこまれていたので、大<sup>おおどころ</sup>所の旦那さんの天ぷらの立食は、なんとまあ呆<sup>あき</sup>れたものだというわけだったのだ。示しがつかないでございまいし、ようとお饗<sup>さん</sup>どんでさえいいうのだ。

立食旦那の家は、店蔵、中蔵、奥蔵、荷蔵と、鍵<sup>かぎ</sup>の手につらなつて、何処<sup>どこ</sup>もかも暗い大きな家だった。奥深い店の、奥の方の棚に、真<sup>しんちゆう</sup>鍮<sup>ゆう</sup>の火鉢の見本が並<sup>なら</sup>べてあるのが、陽<sup>ひ</sup>の光がどこからさすのか、朝の間のある時、通りがかりに覗<sup>のぞ</sup>きこむと、黄色くキラ光<sup>きら</sup>っていて、黄<sup>たそがれ</sup>昏<sup>れ</sup>に御仏壇を覗<sup>のぞ</sup>いたような店の家だった。ああいう家は、金がうなつてると、よく、町の細かい人たちは噂<sup>うわさ</sup>していた。庭は、横の新道までぬけた広いののに、住居

にしている中蔵の前に、コチヨコチヨと石を積上げた築山つきやまをつくり、風入れや、日光をわざと遮さえぎつてしまつて、漆喰しつくいの池に金魚を入れ、夏は、硝子ガラスの管で吹きあげる噴水のおもちやを釣るした。

湯がえりの下駄の齒がカラカラ鳴つて、星が光る霜夜に、

「ま、め——煎いりたてま、め——」

と火をばたばた煽あおぐ音をさせたり、

「いなりさん——」

と、十軒店じっけんだなの治郎さんの、稲荷鮓いなりずしが流してくるようにならなければ、おでんやや、蝶螺さざいの壺焼つぼやきやも出なかつた。夜になると、人力車さえ通らない、この大店ばかりの町は、田舎のように静か



で、夜が更け冴さえて、足袋やさんが打うつ砧きぬたが——股もも引ひきや、腹掛はらかけや、足袋地の木綿を打うつ音が、タン、タン、タン、タン、タン、カツツン、カツツンと遠くまで響ひびき、鼈べつこう甲屋かさんも祝いわいづき月づが近づちかくので、職人を増し、灯を明るくして、カラン、カン、カン、カランカンカんと、鼈甲を合せる焼ゴテの鑲かんを、特長のある叩たたきかたで、鋭く金属の音を打ち響かせている。そんな晩、らんぷや行あ燈んどんの下で、てんでの夜業をしていた家々の奥のものが、夜のお茶受けに、近所にはばかりながら買いにやるのだが——

立食旦那の家内では、総出で、夜更けの屋台店に立並ならんでいる。暖かげな、ねんねこぼんてんへくるまつて、襟巻えりまきをして、お嬢じよつちちゃんも坊さんも——お内儀さんが、懐から大きな、ちりめん

の、巾きんちやく着を出して、ぐるぐると、巻いた紐ひもを解いてお鳥ちようも目くをつかみ出して払うのを、家の者に気がつかれないように、そつと女中にくつ附いて行って、女中の袖の下から、小さな鼻ふくろうのように覗いていたあんぽんたんは、吃びっくり驚して眼を丸めた。

あんぽんたんは、自由に外へ出して遊ばせて貰えないので、物干にあがつて空を見たりとんぼと話したり、瓦かわらの間から、わらじ虫がゆつくり出てくるのを見ていたり、てんと虫を見つかけたりする。そんなときに、ずっと向うの、蔵と蔵との間の低い屋根に、小さな小僧が這出はいして来て、重そうな布団をひっぱり出して干すのをよく見た。あの金物やの小僧は、なんで毎日ふとんをほすのかと、祖母にきくと、「寝もちしなに、お餅もちを煮て、あつたかいのを、

一切食べさせてやればよいのだが——としよりもいるのに。」

といったが、その年よりも、小僧も、景気のいい立食たちぐいには並ばない。あたしは、すこし大きくなってから、また訊きいた。

「なんで、あんなことをするの、みつともないのにね。」

いつまでも、立食にこだわるようだが、問は、やっぱりそれだった。

「お金があるのにおかしい。」

女中さんが笑ったのとは違つて、子供には、家内そろつて、みんな一緒でないのが訝いぶかしかつたのだ。

「あすこは、古いお家うちだから、お精進しょうじんび日が多いのだろう。」

ああ、なるほど——と、ちいっぽけな者にも、その意味がわか

るほど、古風な紙が台所にさげてある家があったのだ。

精進日覚、

×日 朝

×日 昼まで

×日 終日しようじん

そんなふうを書いて張つてあるが、三十日間に、幾日もあきのない家もあった。御先祖さまの日、御先代の日、誰の日、彼の日、等々と、精進日つづきで、どんなけちんぼのところでもお魚をつけるおさんじつ（一日、十五日、廿八日）まで、お精進が繰込んである。時によりものによつて、魚さかなの方が野菜ものより安価なことがある今日とは、魚うおの相場が大変違ふので、大勢の人をつかう大

家内では、巾着と相談の上から考慮された仏心ぶっしんであつたかもしれないが、土地がらに似合わない、洋服を着て抱え車に乗る、代言人の、わたしの父の家でさえ、毎月晦日みそかそうじがすむと、井戸やおへつついを法印ほういんさんがおがみに来て、ほうろくへ塩を盛りごへい御幣をたてたりしても、父も別段やめろともいわなかつたようだ。

その法印さんは眼のくぼんだ、色の黒い人で、小柄で、髪の毛をチョンボリ結んでいたようだったが、はつきりとしなない。神田今川小路の方の河岸かしつきの、引つこんだところに閑寂な小庭を持つて、茶席めいた四枚障子の室へやがとつ附きにあつて、その室のうしろは土蔵で、蔵住居らしかつた。かなり物好きな住居であつたのであろうが、あんぼんたんがわすれないのは、法印さんではなく

つて、娘のお染さんという女だった。

娘といつても、お染さんは、三十を越していたかと思うがその頃のおつくりは地味ゆえもつと若かったのかも知れない。大柄な色の白い人で、別段別嬪べっぴんとは思わないが、『源氏物語』の中の花散る里——柳亭種彦りゅうていたねひこの『田舎源氏』では中なか空ぞらのような、腰がふといようで柔らげで、すんなりしていて、裾すそさばきのきれいなのが、眼にしみて消えないのだった。花散る里を、後日お染さんによそえたのは、お染さんを忘れない日に見たその庭に、一本の梅の木があつて、花が咲いていたのが、そんなふうに思わせる種だったのかも知れない。

お染さんのことで、母が、こんなことをいったのを、子供は耳

をとめていたのだ。

「お染さんが手拭てぬぐいを出すのに、どれにしようかって、葛籠つづらをあけると、役者の手拭ばかりが一ぱいはいつていて——」

あきらかに、驚嘆しているうちに、お染さんの何かを語っていたが、法印さんが死にでもしたのか、それきり家とは縁のない人になってしまった。

「乾けんざん山の皿はどっさりあつたのだが、みんな、法印に賺すかされて、もってつてしまわれやがった。」

父は巻舌まきじたで、晩酌をやりながら、そんなことを言った。法印さんは、そんな品ものも見る眼があつたのだろう。

「おたきは、法印が仲人なこうどだもんだから。」

と、母が遠慮して、ほしがると何んでもやったというふうにい  
たが、母は、深川の豪商、石川屋という廻船問屋の御新造で、花  
菊といった自分の伯母さんの手許もとに、小間使をしていたのだから、  
法印さんは、その廻船問屋のかまどさまもお払いをしていたわけ  
なのであろう。

ある日、お宅に法印さんが来るなら、宅うちでも御祈祷してもらい  
たいと頼んで来たのは、横浜の弗相場ドルで資しん産だいをこしらえ、メキ  
メキと派手な暮しを展開してきた、古鉄から鉄物問屋になった四  
ツ岸だった。

鉄物問屋はみんな景気がよかった。古鉄をあつかった店なんか



でも、すっかり紳商になってしまつて、古い暖簾のれんの多い金物店通りでも、成上りが多かつた。裸一貫で仕上げて来た人だけに、お精進日ばかりが重なることはないから、陽気な跳返つた、人間欲望をまる出しに剥むき出した、傍若無人な生活態度が、古い伝統の町に際立つて見えた。

四ツ岸のおおかめさんは、関取のような巨大な体を、小川湯にまでもつてゆくのに、角力すもうとりが小屋入りするような騒つつまぎで、謹つつましい町を行列して通る。小僧が二人、箒ほうきと衣裳籠いしやうかごと時によると敷しきいざ座ざの巻いたのを担いでゆく。女中が浴衣を抱え、おとのさんという赤熊しやくまのような縮れ毛をした、ブルドック型の色の黒いお附女中が、七ツ道具を金かな盥ならいへ入れて捧げてゆく。今日日は、

花柳界もどきの、そんなふうな磨き道具を素人でも持つが、町ちよう家の女房ではまずない凶かだった。

おおかめさんは、何時も、大勢の娘のうち二、三人を連れていた。娘たちは醜みにくかったが、父親に似て色の白いのや、母親似で太く逞たくましいので、とにかく四隣を押し、押えに番頭さんの女房である瘦やせた、ヒヨロヒヨロの青黄ろい、皺しわの多い、髪かみの毛が一本ならべの女が附いてゆくのだ。

その番頭さんの女房も、お附女中のおとのさんも、おおかめさんの近親であるから、おおかめさんの豪勢ぶりも粗豪で異色があり、せまい小川湯は、たちまちこの一群に占領され特設のお風呂場のごとくなってしまう。

元來、おおどころ大所は、みんな自宅風呂があるのだが、土一升、金一升の土地に、急にのさばり出したものには、金づくだけではその設備をする場所がないのだ。で、豪気な、おおかめさん一家は、けちけち町湯にゆくのが業腹ごうはらで、白昼大門通りを異風行列で練りだすのだった。ときによると、あんぽんたんまで、その人数に加えようと、借かりにくるのだった。

あんぽんたんが可愛いから、売に来てやるんだと、たんかを切る、深川浜はまぐりの蛤町からくる、倶梨伽羅紋くりからもんもん々で、チョン髻まげにゆつているというと威勢がいいが、七十五歳のおじいさん江戸ツ子の小魚売は、やせても昔の型を追つて、寒中でも素体に半纏はんでん一枚、空脛からすね、すこし暑いと肌ぬぎで銀ぐさりをかけて、紺の腹掛と、

真白い晒布さらしの腹巻、トンボほどな小さな丁字髷ちよんまげが、滑りそうな頭へ、捻ねじ鉢巻で、負けない気でも年は年だけに、小盤台を二つ位しか重ねていないが、ちいさな鰈かれいや、鯛こちがピチピチ跳ねていた、生きた蟹かにや芝海老えびや、手長てながや、海の匂いをそのままの紫海苔のりと、水のように透すいて見える抄すくいたての白魚の間から、ちいさなちいさな小蟹かにだのふぐだのを選出よりしてくれる、皺しわの自来也じらいやの、年代のついたりいさみの与三爺じいが、

「げツ、鉄屑かなくそぶとりめ。」

と唾つばきを吐きかけたが、おおかめさんは、それほど豊ゆたやかに肥ふとっている。顔は艶つややかだが赤黒く、体の肉は褻ひだごとつまみあげて、そこここを切りとれば、美事な肉片が出来ると思われるほどだっ

た。だから、その面積もたいへんなもので、体を拭くのに二人が  
かつた。

ともかく、二人の先触れ小僧が、小川湯へつくと、他に浴客  
があろうがなかりうが、衣類の脱ぎ場をパツパツと掃きはじめ、  
塵を敷く、よきところへ着物を脱ぐ入れものをおく。それから尻  
つぱしよりになつて、流し場へ、お湯を酌んだ桶を積みあげ、ほ  
どよく配置して、中央へその一党の場席を大きく陣取つて待ちか  
まえるのだ。馴らされた小者は、他への気兼や、きまりのわるさ  
など、忘れてしまつてゐるほど、おおかめさんが怖いのだ。口の  
中へ一ぱいに大福餅を押込まれたり、あの肥つた体で踏んまた  
がれて、青坊主に剃りたてられるのが愁いのだつた。

そうだっけ、小僧の一人、亀吉は剥身むきみ売りだったのだ。父親の  
ない、深川ツ子の剥身売りが、おおかめさんの台所の障子口から  
顔を突ツこんで、買つとくれようといったのが縁で、この連中が  
面白がって小僧にしたのだから、気に入らないと、剥身を売って  
いたときの、着物きせて、大門通りを歩かせるぞと言われるのが、  
よっほど恥かしかつたものと見える。

も一人の平三は、車力しやりきの親方の子で、『菅原伝授手習鑑すがわらでんじゆてならいかがみ』  
の寺子屋、武部源造たけべげんぞうの弟子ならば、こいつうろんと引つとらえ  
と、玄蕃げんぱんが眼を剥むきそうな、ひよわけで、泥亀すつぽんに似た顔をし  
ている。亀吉の精悍せいかんさが眼立ちもしたが、平三の背景は亀吉と  
ちがって、おおかめさんの連合つれあいが若い時分、吉原ねんあの年明けの女

郎が尋ねてきたのを、車力宿で隠囲かくまってやっていたというのが、不心得で、親たちがおおかめさんに忠義でないといわれるぐらいだった。

おおかめさんの風貌ふうぼうを、もすこし委くわしくいえば、体の大きさと眼との釣合くじらは鯨を思えばよかった。鼻は、眼との均衡がよいほどだが、豎たてに見えるほどの穴が実に大きい。私は古面こめん展覧会で鎌倉期の、だれだかの作で、笑った女の面が、眼も鼻もなく、顔の真中につぼまって、お出額でこと、頬つぺたと、大きなあごに埋まってしまつて、鼻の穴だけが豎に上をむいた、いかにも親しみやすい平民の女の顔を見たとき、ふつと、おおかめさん一族の女に共通だったものを見て、お面に笑いかけてしまった。けれど、古面の

方は眼が糸目なので——開いても柔らかいであろうが——おおかめさんは、小さな眼が、奥のほうで濁った鋭さをもっていた。

おおかめさんとは、大旦那に対する、大内儀おおおかみさんの意味で尊

称なのであろうが、自分でいうとおおかみさんになり、出入りの相おすもう撲さん×山関がいうとおおかめさんとなる。狼おおかみがいいという

ものと、大お亀かめの方が縁起がいいというものと、どっちもごつちやだ。

おおかめさんの御機嫌にさからうと、

「どいつもこいつも、みんな出ていけ。」

と家中のものが、一ひとあつ集めに頭から怒鳴られる。お品よく、お品よくと、お附女中から、大番頭さんの女房まで揃えても、ともし



ると夏は諸はだぬぎになつたりして、当り屋仲間の細君が、以前から大家たいけだつたように勿体もったいぶつているのと、歩調が合わなくなると、

「あのお虎婆め、常磐津ときわづもろくに弾けない、もぐり師匠だつたのを、わすれやがつたか。」

と自分のおさとまでぶちわつて、向う角の、蔵造りで、店は格子を閉めてある、由緒ありげに磨きあげて、構えこんでいる黒光りの角蔵かどを睨にらんで、その奥座敷におさまる比丘尼びくに婆の、紹ろの十徳を着た女隠居に当りちらすのだった。

おおかめさんは八丁堀の古着屋の娘、近所の古鉄商の若い衆で、田舎出だが色白で、眼鼻立のはつきりしたのに惚ほれこんだのだ。

若い衆の方は、金がなくても、夜寝床から裸でぬけだして、駕籠かごで飛ばして行くと、吉原で花魁おいらんがたてひいたんだと、紳士になってからも、湯上りにはすっかり形式をかなぐりすてて、裸になって、手拭を肩へかけ、立膝たてひざでお酒をのんで、土用のうちでも、蔵前のどじょう汁だとか、薬研堀やげんぼりの鯨汁好みが、汗をふきふき、すっかり紳士面になりきってしまった仲間をこきおろすのだった。平日ふだんは重い口が、顔が赤銅色に染まると、

「××屋は、すっかり殿さまぶつちまやがって、芸妓げいしやが来ても、おお、来たか、近う近うなんていやがる。夜つびてよ、蠟燭ろうそくでよ、銭勘定したり、横浜までゆくのに、旅費がなくなつて、宿場しゆくばの牛太郎ぎゆうたろうまでしやがったことわすれてやがる。」

それは横浜に居ついて、旧大名の真似をした暮しをしている、輸入商になつた、当り屋仲間のことだつた。そのまがい殿様の奥さまは、大柄な、毛の多い、顔色の悪い女で、つとめをしていた女の上りだつた。

××屋は広い店と、広い住居をもつていて、主人は白い長いあ鬚ごひげをひつぱり、黒ちりめんの羽織で、大きな茵しとねに坐り、銀の長ぎぎせるで煙草タバコをのみ、曲きょくをおき、床わきには蒔絵まきえの琵琶びわを飾り、金きん屏びょうの前の大瓶がめに桜の枝を投げ入れ、馥郁ふくいくと香かを炷たくというおさまりかたなので、

「いやな奴やつだ。」

と、くさしながら、どじょう汁の大旦那も、古道具やから、高価

な偽にせもの物をつかませられる好いとくいお顧客とくいだった。

おおかめさんは、家うちでは金が出来てしかたがないのだといった。いつでも、せまいほど家のなかがウザウザして、騒そうぞう々ぞうしい家うちだった。樽たるづめのお酒を誰かしら飲のみ口くちを廻めぐしていた。放ほう縦じゆうだった。娘たちは、夜になるとねんねを着た襟えりを、背中の見えるまでグツと抜ぬ衣きえもん紋もんにして、真白ましろに塗ぬった頸くびにマガレットマガレットに結むすつて、薔薇ばらの簪かんざしを挿さしたり、結ゆい綿わた島田しまだに結むすつて、赤と水浅黄あかの鹿かの子をねじりがけにしたりして、お酒をのんでいた。おおかめさんが寝間着どてらに寛袍かんぱうをはおつて、大座ぶとんに坐まり、それをつり巻まいて振り将棋しょうぎみたいなことをして、みんなが賭かけた小銭こせんを、ザクザクと、おおかめさんは座ぶとんや、膝ひざの間に押入れて、忽たちまちの

うちに勝つてしまふ遊びをした。パスでも、みんながかけた。おはなもした。

束髪の娘は英語の教師に走り、結綿は駈落ちするところを、小僧の亀かめどんが見つけて騒ぎ出したので、かえつておおかめさんに叱られたのだといったが——末の子の、おつちやちゃんちゃんが亡くなると、思い出してしようがないから、おないどしのおんぼんたんに遊びに来てくれと、贈りものをよこしては迎いにきた。

「あれで、鬼子母神きしぼじんさまなんだ。」

使いに来た、先方とも此方とも共通の、近所の出入りの者がい  
うほど、足のわるい末っ子を可哀がつていたのかどうかわからないが、あんぼんたんが借りられなければならぬわけは、別にあ

つ  
た  
の  
だ。  
。

# 青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「桃」中央公論社

1939（昭和14）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 鉄くそぶとり

## 続旧聞日本橋・その二

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫  
著者 長谷川時雨  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>